

考試科目	日文小論文	系所別	日本語文學系	考試時間	2月2日(五)第3節
------	-------	-----	--------	------	------------

以下の文章を読み取った上で、次のテーマで3000字~4000字の字数限定で日本文で小論文を書きなさい。(100%)

テーマ：「近代日本の表現上の「私」と「公」の断絶と閉鎖性——〇〇〇 (作家、作品、事件、社会現象) を例として」

1. 柄谷行人は初期の評論において、夏目漱石の『こころ』の中で「先生」の遺書が、「K」に対して告白できなかったことについての後悔に満ちているということについて、次のように述べている。

「だが、われわれはむしろこういうべきではないか、真実というものはつねに、まさにいうべき時より遅れてほぞをかむような形でしかやってこないということ。そして、このずれには何か本質的な意味があるということ。

真実を語るとは告白するということだ。誰でも口にしうる真実などというものは真実ではない。そして、告白するということは、身を裂くような、そして、それを書き付けたなら紙が燃え上がる (E・A・ポー) ような行為である。先生は告白できなかった。なぜなら告白がたえず一瞬遅れたからである。というより、われわれは常に告白において一瞬遅れるほかないというべきだ。いかに我々が真実であろうとしても、それに僅かのずれが生じる。」(「意識と自然——漱石試論 (I)」)

(大澤真幸「柄谷行人、予言の呪縛」『近代日本思想の肖像』(P57-58))

2. 福嶋亮太：

柄谷さんの『日本近代文学の起源』(八〇年)の「内面の発見」という論点にしても、その四年前に出た山崎正和の『不機嫌の時代』(七六年)で先取りされていると思うんですよ。『不機嫌の時代』によれば、日本の作家は明治国家に公を篡奪されてしまった。その結果として、作家というものは不機嫌な「私」の領域に閉じこもることになった。つまり、「内面」の領域に脱却し、ときにはホモソーシャルな友情に慰めを見出すことにもなった。「公」はすべて国家に集約され、「私」はすべて内面と友情に集約される。その間の公共的なものというのがないわけです。これはいまでも大きく変わっていないので、近代日本の表現上の弱点は大体『不機嫌の時代』で語られてしまっていると思う。

大澤真幸：

大雑把な図式で言うと、六〇年代には歴史なり意味なりに固執しているのが、八〇年代には構造や情報に行く。過渡期ゆえに両義的だったのが七〇年代。九〇年代には再び歴史/政治へと全面回帰していくこととなります。

(「プレニューアカの可能性」『現代日本の批評 1975-2001』)

備註	一、作答於試題上者，不予計分。 二、試題請隨卷繳交。
----	-------------------------------